

風に吹かれて

戦中戦後の体験という表題からの私の体験は、凡々たるものでしかありません。そこで邦訳の詞を、凡々たる体験を今一度覚醒出来ればと思ひ、引用させていただきます。ノーベル文学賞の対象となったボブディランの「風に吹かれて」の歌詞です。一節と三節です。

どれだけの道を歩めば／一人前の「男」とみなされるのだろう／白鳩はどれだけの海をわたれば砂の上に休むことが出来るのだろう／どれだけの砲弾が飛び交えば撃つことを止めることができるのだろう／友よ

「答え」は風に吹かれている人は何度見上げれば／空を見ることが出来るのだろう／人はどれくらい耳があれば／人々の悲しみが聞こえるのだろう／どれくらいの人々が死ねば／あまり多くの人々が死んだことに気づくのだろう／友よ「答え」は風に吹かれている

曲も、聞き慣れ訴えかけてくるような旋律で耳に入ってきました。

戦前、戦中、戦後の悲惨な体験を語り継ぎ伝えていく、その義務が、当時を体験した人々にあり、二度とあの悲劇を繰り返してはならないと、朝日新聞の声の欄で「語り継ぐ戦争」の副題で、数多くの体験談が掲載さ

れたりしています。

その生身の体験者の声が、今の世相を見ていて、これらの声が人々の心に届き刻み込まれているのだろうかと思わずにはおれません。ポプデイランの嘆きそのまま「友よ『答え』」は風に吹かれて「いる」と同調せざるをえません。しかしこの歌は絶望を歌ったものでなく、人々に語りかけ、目覚めを願う歌っているのです。

私は一九三四年に尼崎で生まれ、国民学校五年生になった春、S金属に勤めていた父の転勤で和歌山市の社宅に転居しました。

敗戦の年の七月に和歌山市に空襲があり聞き覚えですが七百八人の犠牲者が出、紀の川の堤下に何体かの遺体が菰を被せられ、数日、炎天下に放置されていました。

住居は紀の川の北側に位置していた空襲から免れました。和歌山市は城も含め、焼け、白壁の蔵が所々に残る瓦礫の街と化しました。それが和歌山市だけでなく全国の主要都市の殆どが空襲で瓦礫化されたのです。

その戦争の旗振りした行政は、いや国はといふべきでしょう、その時その場そして以後も「知らんぷり」を決め込み、罹災者を困窮のままに放置したのです。
(中西義明)

なれの果て

一九四五・七・日本に対して無条件降伏を勧告するポツダム宣言が発せられました。時の鈴木内閣は天皇制を冠とする国体護持から宣言を無視しました。結果、広島と長崎に、原爆が投下され、両市併せて三十万人以上の人が一瞬にして犠牲になりました。

昨年のノーベル平和賞授賞式での（ICAN）のサロー節子さんの講演から一部引用します「幽霊のような人たちが、足を引きずりながら行列をなして歩いていきました。恐ろしいまでに傷ついた人々は、血を流し、やけどを負い、黒こげになり、膨れあがっていました。体の一部を失った人たち。肉や皮が体から垂れ下がっている人たち。飛び出た眼球を手に持っている人たち。おなか破裂けて開き、腸が飛び出て垂れ下がっている人たち。人体の焼ける悪臭が、そこら中に蔓延していました」日本の主要な都市でも焼夷弾による空襲で、沖縄では本土決戦の防波堤にされ、上陸した米軍との戦闘で市民が崖から飛び、あるいは避難した洞窟で泣き叫ぶ我が子の首を絞めて殺し、火炎放射機で焼かれ、同様に、生き地獄を招いていました。結果、日本はポツダム宣言をやむ

なく受諾し、無条件降伏したのです。

「一億火の玉」とか「一億総玉砕」とかささんさん聞かされていて、私は母に聞きました「死なないかんのか」

「天皇は神さんやしどうなるんやろ」

次兄の戦死公報がきました。

食べ物配給も事欠きありません。次姉が和歌山へ引越後結核でなくなり、その姉の着物を持って、摘発を気にしながら母は箕島まで買い出しに、時には私も同行しました。

父が父自身の不始末で工場の一部を火災させ、責任上会社を退職。収入の道が一切なくなりました。母は尼崎に居た頃、髪結いをしていてかなり蓄えもあったと思いますが、物は無くハイパーインフレで生活苦は募る一方です。父は漁師に活路を見出そうとしましたが失敗。幸いS金属の社内下請けに採用されました。

街では浮浪児狩りがあり、闇市ができ、子供たちはジープで巡回している、かつて「鬼畜」とか「赤鬼」と蔑視していた米兵を見ると物をねだりました。誰もが空腹でした。米兵はガムか、噛みたばこか、絶えず口を動かしていました。「撃ちてしままん」「欲しがりません勝つまでは」等の標語を真に受けた子供たちのなれの果ての姿です。（中西義明）

敗戦から新憲法へ

戦争は人々に苦しみと悲しさをもたらしました。

大本営発表の新聞紙上を飾ったニュースは敵機撃墜、敵艦撃沈と華々しく、反して我が軍の損害は軽微でした。そして中国東北地方（満州）への入植が奨励され、開拓団と称し、（実は棄民政策）映画館のニュース映画では戦勝に喜ぶ現地の兵の画像と共に、開拓に胸を膨らませた人たちの笑顔が映し出されていました。国内では行政のパイプ役の国防婦人会が子供たちに小旗を振らせ、出征兵士には幟を立て「万歳、万歳」と斉唱させて見送ったのです。

「産めよ増やせよ」の号令のもと出産が奨励されました。

その内に金属類の供出が強制され供出。「贅沢は敵」です。食べる物が無くなり、配給制となり各々の家に配給手帳が交付されました。

学校の運動場は畑になり、子供たちが開墾し、主に芋蔓の苗を植えました。中学生は工場へ動員をかけられ、低学年の小学生は、田舎のお寺などに家族から離れ、強制移住されました。

そのような状態になっても、人々は日本の勝利を信じて、いや信じさせられていました。

一九四五・三月東京に焼夷弾による大空襲があり、続いて大阪を中心に阪神地区、京浜地区等全国の主要な都市は被弾し瓦礫の街となり、沖縄が米軍の上陸で主戦場となり、それでも「天皇制」を頂く神代から、連綿と続く神の国では、敗戦という言葉は禁句で、最後には敵を引きつけて「神風」が吹いて日本は勝利する、と洗脳され信じ込まれていました。戦争で領地を拡張、勝った勝ったとはしゃがされたものの、暮らし向きは酷くなる一方でした。

これが戦争です。中国人は二千万人以上、日本では三百万人余りが犠牲になったのです。戦後、や々と新憲法が国民の内なる要請で施行されました。その九条を引用します。

第二章 戦争の放棄

第九条（戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認）日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。交戦権は、これを認めない。

素晴らしい条文です。（中西義明）

新憲法が施行されました。

新憲法をあたり前に素直に解釈すると戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認をし、武力による威嚇と行使を放棄、そして陸海空の戦力は持たず国の交戦権は認めない。この憲法で日本は戦争と無縁の国になったとしか読めません。

当時、私は中学生で社会科の先生から第二次大戦を日本は経験して、戦力を一切持たず戦争をしない国になったと教えられ、生徒たちは声を出し手を叩いて喜んだものです。

当時の国会で共産党の野坂参三さんが「自衛のための軍隊も認めないのか」と追及して、総理大臣の吉田茂さんは「昔からみんな自衛のため自衛のためと言いながら侵略戦争でも何でもやっている。だから今度の日本の憲法は自衛のための軍隊だつて認めないんだ」とはつきり答えています。

空襲はない、引き揚げてくる帰還者の名前がラジオから聞こえてくる、白衣の傷痍軍人が杖を付き繁華街で物乞いをしている、一方で瓦礫の中から半焼けの木材などをかき集めバラックを自力で建て、住み始めた人達もいる。「リンゴの唄」が聞こえてきて時間の経過と共に「買物ブギ」「青い山脈」へと変わってくる。乗車

口が人で膨らんだ超満員電車に乗って行く人たち、日本人のたくましさも、へこたれない強さというのか、戦後の活気ある風物が見られました。

これももう戦争は二度とご免やという人々の気持が培われたからだと思えます。それを担保したのが新憲法だったのです。憲法で主権が国民に、そして健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を得たのです。

全般的に見て、人々の戦後の復興期の生きていくこうとした、前向きな姿勢はほんとうに力がありました。

もう一つ大きな変化は民主主義が国を納める制度となりました。同時に家制度も家父長制も解体されました。長男が家の一切を継いでいたのを兄弟姉妹で等分に分けることになったのです。土地改革も断行され地主・小作という関係が無くなり、小作人の耕作地は小作人のものに、年貢米を納めることもなくなりました。

敗戦で国の仕組みが変りました。徴兵の義務がなくなり、言論、表現の自由が得られました。女性に参政権が認められ、根強い性差による差別が残るものの表向きは男女平等同権となり、新憲法のもといろんな制度が変りました。

（中西義明）

民がいて国がある

一九四六年教育制度が六三三制となり、私は新制中学の一期生となりました。見慣れた広大な瓦礫の焼け跡も、バラックから普通の家へと建ち始め、一方で駅周辺に闇市が出来、鍋を持って雑炊を買い求める人、いろいろな物が戸板の上に並べられ売りに買っている人、大勢の人が来ていてそれこそ雑踏そのものでした。

空襲が無くなりましたが、食べ物には依然としてありませんでした。衣類などはアメリカ人が不要としたものが送られてきて、配られ、寸法直しなどをして着用していたようです。

戦中引越後、私の姉が結核（脊髄カリエス）で亡くなりましたが、棺桶が無く坐棺で、頭を抑え込むようにして詰め込まれて蓋をされ、リヤカーで焼却場へ運ばれていったのを未だ鮮明に覚えています。

このようにあらゆるものが不足していました。

戦争をするということは、物が無くなり不自由を強いられるということ、そして国は戦費調達で莫大な国債を発行し、国民や企業に国債を売り付け、敗戦を契機にインフレをダシにし、巧みに償還したのです。

こうした殺し合いを強いる戦争というものは、そういう内実を持った

ものだということを経験しなければならぬと思います。

私は小学五年生の時でした。戦争中です、生涯を通じて最高のランチを食べました。母がえんどう豆のご飯を、節約した米で、土鍋の底に、へばりついていてる程の量でしたが、炊いて食べさしてくれました。

「みんな食べい、お母ちゃんは今までおいしいもん一杯食べてきたし。戦争なんかで死にとうないな」

茶碗に二杯程の量でした。

母はこんなことも言いました。

「あんたが物心ついた時はもう戦争で、ほんまにええ時を生きてるといふ思いなんかないわな。こんな時世やもんな。芋と麦の入ったお粥ばかりで、白いご飯たべたいやろ。せやけど、今に見ていろとか見返したるとか思わんでもええ、ただな、何くそ、という気持ちだけは失ったらあかん。何くそや」

その母は私が中学三年の時過労から心臓を患い亡くなりました。

私は、国は母のような市民が大勢いるということを知ってほしいと思います。国があつて民がいるのではなく、民がいて国があるのです。まさしく民主です。民主主義はこのことが原点です。

(中西義明)

百人の一步

今度世界戦争が起きれば、人類の、いや地球の終末を迎えることになるとも言われています。

そうならないように喜怒哀楽があつて恋もし涙し笑う、時には怒り、そしていろんな人がいて、みんなが見えない信頼という糸で繋がっている、そんな生き方をしたい、と思う。

日本の憲法はおろかな戦争を経て、できて、そういう平和な世へ導く最初の標識です。次の標識が戦争だったということがないようにしたい。そして最終の標識には「戦争という言葉は廃語になりました」です。

田中角栄が言っています「戦争を知っているやつが世の中の中心にある限り、日本は安全だ。戦争を知らないやつが出てきて日本の中核になると怖いな」

吉田茂も防衛大学校の一期生の卒業式で訓示しています「自衛隊が国民から歓迎され、ちやほやされる事態とは、外国から攻撃されて国家存亡の時とか、災害派遣の時とか、国民が困窮している時だけなのだ。言葉を変えれば、君達が日陰者である時のほうが、国民や日本は幸せなのだ」

保守派の二人がこんなことを言っていたのです。標識とまでいかなく

ても、矢印程度の道しるべにはなる言葉でしよう。

自衛隊は、憲法は自衛権まで放棄していい、だから専守防衛に徹する限り合憲だ、という論。一方、防衛の域を超え既に攻撃型の近代装備を備えている、この際、自衛隊も隊員も日陰者でなく軍としての在り様を。という改憲論。

このように論理を展開すれば「私の戦中戦後」のテーマから逸脱して、いと批判されそうです。しかし私は敢えて言います。未だ戦後だ。憲法に則った戦後処理は戦争責任も含めて意識面で未完のままになってい。はつきり言います、自衛隊は憲法違反である。このように言うのは過激でありません。憲法を普通の脳で素直に読み解釈しそう思うのです。

既成事実をどんどん先行させて情況に合わなくなつたから解釈改憲から改憲へ、これは戦前の日本軍の世論操作の引き写しそのものです。

社会評論家の、亡くなられていますが、丸岡秀子さんが言われたことを私も引用します。「一人の百歩より百人の一步」。誰もが力を合わせ着実に歩んでいく、このことがみんなの幸せに繋がり、結果的に国に力をつけていくことに。

(中西義明)